

—〈ひと〉〈暮らし〉〈ことば〉からさぐる—

## 札幌からアイヌの歴史を考える

—中央区北3条西7丁目の20世紀—



小川 正人 (おがわ まさひと)

北海道博物館学芸副館長兼  
アイヌ民族文化研究センター長

1994年6月北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員となる。2015年より同研究センターの統合による北海道博物館発足により北海道博物館勤務。アイヌ史を担当、特に近代アイヌ教育史を中心とする調査、研究及び博物館の業務に当たっている。

札幌市中央区北3条西7丁目——現在は、北海道庁別館や水産ビル、マンションなどが立ち並び、東側（西6丁目）には北海道庁の本庁舎や赤れんが庁舎が、西側（西8丁目）には北海道大学植物園がある、都心の一角です。

## キリスト教伝道者ジョン・バチラーの住まい

この北大植物園の中に、バチラー記念館と呼ばれる建物があります。明治から昭和にかけてアイヌに対するキリスト教の伝道などに従事したことで知られるイギリス人ジョン・バチラー（1854～1944）の札幌での住まいを移築したものです。この住まいが建っていた場所が、北3条西7丁目でした。

1877（明治10）年に北海道・函館に来たジョン・バチラーは、ほどなくしてアイヌ民族に対する伝道に熱心に取り組むようになります。1892（明治25）年1月、バチラーは、道庁の所在地であり当時の伝道

の主な対象だった日高地方や胆振地方へも比較的近い都市である札幌への転居を果たします。このとき住んだ家が、北3条西7丁目1番地の家屋でした。

バチラーは後年の回想で、当時の家屋のことを、「元活版所のあとで随分古い二階建てで〔中略〕夜は寒くてとても二階で寝ていられません」と語りつつも、「この家で有難いと思ったことはたった一つありました。それはこの家の地所が北水協会の物でしたから安く貸して頂けた事です。」（『ジョン・バチラー自叙伝 我が記憶をたどりて』、1928年）と述べています。

ここに出てくる「北水協会」とは、1884（明治17）年に北海道の水産業の改良・発達を目的に設立された組織で、当時から北3条西7丁目にあり、現在も公益財団法人北水協会としてここに事務所を構えています。初代の会頭をつとめた伊藤一隆（1859～1929）がキリスト教徒で、バチラーとつながりがあったことが、家屋と土地の提供の背景にあったと思われます。

## 札幌農学校博物館敷地のメモ

図1は、バチラーが転居する直前、1891（明治24）年に発行された札幌の市街図の、北3条西7丁目付近のようすです（アイヌ語地名研究者の山田秀三が、自著『札幌のアイヌ地名を尋ねて』（楡書房、1963年）の自著の挿図として筆写したものです）。図のやや右寄りの上のほう、「道庁」と「博物館」（札幌農学校の博物館）の敷地に挟まれた、「北水協会」とある区画が北3条西7丁目です。



図1

そのすぐ西側、博物館の敷地の端を、小さな池のような川が流れています。敷地内に泉地があってそこから水が湧いていたそうです。川は敷地をぐるりと廻るように流れて、北へ向かっています。当時はこの川にもサケがのぼってきて、自分のところで働いていたアイヌがヤスで突いて捕らえてきてくれた——とバチェラー自身も回想しています（仁多見巖『異境の使徒 英人ジョン・バチラー伝』北海道新聞社、1991年）。

山田秀三は『札幌のアイヌ地名を尋ねて』の中で、「湧泉のあるような池の事を、アイヌ語ではメムと云う。札幌の北部は地下水位が高かったので、至る処の凹地にメムがあった。それ等の池は、後に殆どなくなったが、今でも大きな施設や邸宅の中に跡が見られる。」と述べています。北3条西7丁目のすぐ西側を流れているこの川も、こうしたメムから発した流れの一つでした。図を見ると、この川は北3条西7丁目のところで、博物館の敷地を越え道路まではみ出しているようですがわかります。現在も、ちょうどこの辺りだけ、道路が少しだけ低くなり、わずかばかり屈曲していて、土地のすがたを伝えてくれるかのようです。

### 雑誌『ウタリグス』

バチェラーは、1898（明治31）年の春、同じ北3条西7丁目の2番地に新居を建てて引っ越します。1919（大正8）年、バチェラーを団長とする「アイヌ伝道団」という組織が発足。翌年12月、アイヌ伝道団が発行者となって雑誌『ウタリグス』を創刊します。発行所の住所は「札幌区北三条西七丁目ノ二」、バチェラーの自宅でした。

編集や執筆の中心を担ったのは、有珠（現伊達市有珠）出身の片平富次郎（1900～59）、同じ有珠出身でバチェラーの養女となったバチェラー八重子（1884～1962）、その弟・向井山雄（1890～1961）、長万部出身の江賀寅三（1894～1968）ら、このとき20～30歳代のアイヌの若者たちでした。また1921（大正10）年3月発行の第1巻第3号には、虻田郡辨辺村（現豊浦町）の佐茂菊蔵（1895～1954）が寄稿していますが、「部落の代表となって、或所用を帯び出札」した際にこの

北3条西7丁目を訪れ、その一室で「筆を執って原稿紙に向った」と述べています。様々な目的で札幌を訪れた人が、ここに立ち寄っていたことが想像できます。きっと、いろいろな話をし、情報のやりとりがあり、思いや意見が交わされたのではと思います。

### バチラー学園

北海道の開発が進み、アイヌ民族も否応なくその中で自分たちの将来を考えていかなければならない時代になると、子どもたちに小学校ばかりでなく高等小学校や中等学校の教育を受けさせたい、と望む人々が増えてきました。先に紹介したアイヌ伝道団も、1921（大正10）年2月に開かれた第1回総会において、委員（日高の平取や十勝などのアイヌの人々でした）の意見により団の規則を修正し、団の「目的」に「教育事業」を加えています。同年8月の第2回総会では、議題の一つとして「団発展の有効なる方法」を議論し、「多数の論議」をへた「決定議」の中に、「児童を選抜して特別教育を与へ……高等教育を授くる準備となすこと」がありました（『ウタリグス』第1巻第7号）。

当時、北海道にもようやく中等学校（中学校、高等女学校）の設置が広がりつつありましたが、その場所には札幌のほか函館、旭川、小樽、釧路といった都市に限られていました。バチェラーは、1924（大正13）年に、高等小学校や中等学校などに進学するアイヌの若者を支援するため、「アイヌ保護学園」という組織を設立し、北3条西7丁目の自宅敷地内に寄宿舎を建築しました（写真1）。「アイヌ保護学園」は1929（昭和4）年に財団法人となり、「バチラー学園」と改称します。



写真1 バチラー学園



写真2

寄宿舎の設計を手がけたのは、後に札幌北一条教会や網走市郷土博物館、北海道家庭学校本館、札幌市教育文化会館などを設計した建築家・田上義也（1899～1992）。当時まだ20歳代半ばの青年でした。寄宿舎の完成から間もない1924（大正13）年10月4日付けの『小樽新聞』は、写真を交えて建物の様子を報じ、通風と採光に苦心した、との田上の談を紹介しています（写真2）。

これに先立つ同年7月、寄宿舎の落成直前にバチラーを訪れた『室蘭毎日新聞』記者は、建築中の寄宿舎を案内され、このとき既にバチラーのもとに寄寓していた「北海中学の制服を着」た「喜多風秀二郎」という青年に会っています（7月7日付け記事）。この青年は名寄出身の北風周二郎のことと思われる。彼は北海中学に学び、卒業後、白老第二尋常小学校の教員をつとめたこともありました。

寄宿舎落成後には入所者も増え、1931年度には男女合わせて14名、1933年度には13名がここで暮らし、札幌の中学校や高等女学校などに通っていたとされています。写真3は1931（昭和6）年の「大日本職業明細図」と題された、商店や企業、公共施設などを多く記載した都市・市街地の案内図です。北3条西7丁目のバチラー学園のある区画には「カタヒラ療院」とあります。

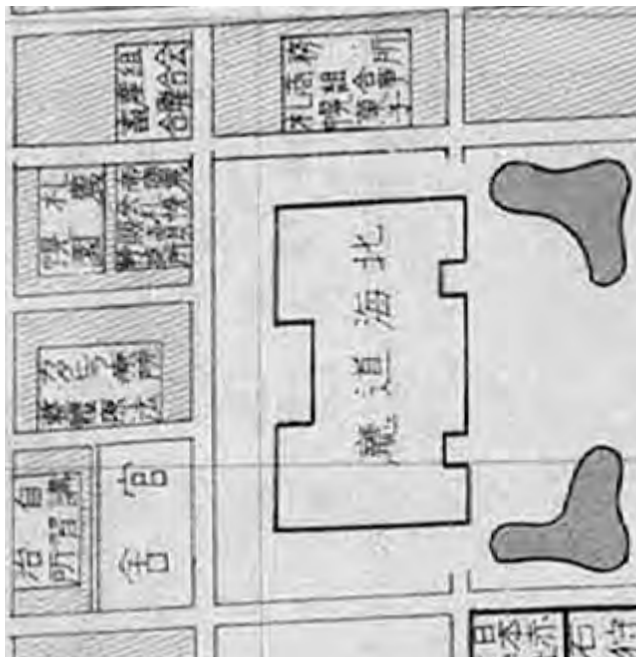


写真3

これは片平富次郎が指圧による整体などを営んでいたことによるもので、近隣の人々にとってはそのような場所でもあったことがうかがえます。

### 雑誌『ウタリ之友』

1933（昭和8）年1月、バチラー学園内の「ウタリ之友社」が発行所となって雑誌『ウタリ之友』が創刊されます。先に紹介した雑誌『ウタリダス』が、いつごろまで・どのように刊行されていたのかは、わかりませんが、『ウタリ之友』は、発行所の住所が同じで、編集・発行人も片平富次郎であり、『ウタリダス』の後継誌的なものと考えられます。

写真4は『ウタリ之友』1933年4月号の表紙と、目次の一部です。この号に限らず、誌面には、片平富次



写真4

郎、バチラー八重子、向井山雄らのほか、知里高央（1907～1965）らより若い世代の執筆者や、女性の執筆者が増えています。1933年9月号には「学園文藻」と題されたコーナーがあり、バチラー学園の寄宿生と思われる生徒たちの文章が載っていたり、同年2月号では、樺太のアイヌ民族による戸籍獲得を求める活動（樺太は1905年から日本の統治下となりましたが、樺太のアイヌ、ウイльтаなど先住民族には国籍がないままで、国籍を求める運動の結果、アイヌ民族のみ1933年から国籍を獲得することになったのです）に触れていたたりなど、誌面に登場する人々の顔ぶれがより広がっている様子がうかがえます。

### 北3条西7丁目を行き交う人々

この北3条西7丁目には、学園の寄宿生や関係者ばかりでなく、様々な人々が訪れています。

『ウタリ之友』の1933年4月号巻末の「消息」欄には、いろいろな人たちの近況——4月という時季を反映して、卒業や進学、進級の報せなど——が掲載されています。その一つに、白老の「野村義一君」らが「三月三十一日専検受験のため出札した」とあります。「野村義一君」とは、後に北海道ウタリ協会（現北海道アイヌ協会）理事長を務めた野村義一（1914～2008）のこと、「専検」とは専門学校入学資格検定試験で、これに合格すれば当時の専門学校（現在その多くは大学になっています）入学試験を受験する資格が得られるということで、経済的な事情などで中学校に進学できなかった若者が目指した試験の一つです。

野村義一自身も、自らの回想の中で「バチラーの寮にいた」ことがあると語っており、「知里真志保先生が一高の帽子を被ってきて、バチラーの寮で一緒に寝たことがあります」と述べています（野村義一『アイヌ民族を生きる』草風館、1996年）。知里真志保（1909～1961）は登別の出身で、このとき旧制一高を卒業し東京帝国大学への進学が決まっていた。当時18歳の青年・野村義一にとって、自分が生まれ育った白老からほど近い登別から抜群の成績で一高に進学した先輩の名は、つとに聞かされていたと想像できま

す。その先輩と間近に接したことは、特別な記憶として刻まれたのではと思います。

野村義一の下でウタリ協会副理事長をつとめた貝澤正（1912～1991）は、その少し前、1931（昭和6）年8月に札幌で開催された「全道アイヌ青年大会」に、地元・平取の先輩に誘われ参加しています。貝澤正は、当時を回想して、「そのときバチラー学園に泊まったんだと思います」と述べ、バチラー八重子が、西洋料理の食べ方に慣れない人々のようすを笑った若い女性たちをたしなめていた様子や、貝澤正自身が書いた短文（8月1日付け発行の雑誌『蝦夷の光』第3号掲載の「夕暮」という文章です）に、「メノコ共」と書いたことについて、バチラー八重子から注意された、と語っています（同前『アイヌ民族を生きる』）。「メノコ」とは女性（成人女性）のことです。おそらくは女性たちに対して「共」という言葉を使ったことを、バチラー八重子は咎めたのでしょう。貝澤正自身がこのことを長く記憶している点に、このときの経験・見聞が自身にとっても気付きの機会になった様子がうかがえるように思います。



写真5 バチラー八重子

### 北3条西7丁目のその後

バチラーは、日中戦争が長期化する中、1940（昭和15）年末にイギリスに帰郷し、学園もこのとき閉鎖されたとされます。いま学園の建物は現存しておらず、バチラーの自宅の建物は、最初に書いたとおり、1962（昭和37）年に北海道大学に寄贈され、翌1963年に植物園内に移設、現在に至っています。

戦後、1946（昭和21）年に社団法人北海道アイヌ協会が発足、その後1950年代の全体的な活動の低迷期を経て1960（昭和35）年に再建総会を開催、「アイヌ」という言葉そのものが厳しい偏見にさらされる時代の中、翌61年に「北海道ウタリ協会」と名称を変更、1970年前後から徐々に活動を活発にしていく中、1974（昭和49）年4月にウタリ協会の事務所は北3条西7丁目の北海道社会福祉館の中に置かれることになりました。以来建物の改築、北海道庁別館庁舎内への移転などを挟みつつも、1991（平成3）年まで、ウタリ協会事務局の住所は北3条西7丁目でした。この年11月に道民活動振興センター（かでの2・7）が竣工、北海道ウタリ協会の事務局もここに移転し、現在に至っていますが、その住所は道路を1本挟んだ、北2条西7丁目。北3条西7丁目は、20世紀を通して今に至るまで、人々が行き交い、出会い、語り合ってきた、アイヌ史の舞台の一つなのです。

### 近代の札幌の街に暮らし、行き交ってきた人々の歴史から

ところで、北海道庁が毎年発行していた『北海道庁統計書』では、1890年代以降の札幌（当時は札幌区、1922年市制施行）のアイヌの人口は零（記録されていない）となっています。実際にはアイヌ民族が暮らしていたのに、行政の統計では把握されてこなかったのです。一昔前の札幌の郷土史の本には、最初のほうはアイヌ民族のことが書いてあっても、明治になると、「大友堀の開削」や「屯田兵村の設置」などは語られても、アイヌ民族の存在がほとんど描かれなくなるものが、たくさんありました。移住してきた人々が多く辛酸を経験しながら地域を築いてきた営みは、言うまでもなく、とても大事な、永く継承されるべき歴史です。そして、先住してきたアイヌ民族もまた、同じ時代・同じ社会で、様々な労苦を蒙りつつ希望や未来を求めてきた、その歩みが広く知られることで、北海道の歴史は豊かになるはずなのです。

札幌の街が広がる平野には、いくつものアイヌ民族の集落がありました。ここに都市が造られていく中で

その居を移した人々もいましたが、札幌で暮らし、この街の一員として社会を作ってきた人たちもたくさんいます。その一端を、今回と次回とで、辿ってみます。これから一年間の連載を、ここから始めたいと考えています。

図1で北3条西7丁目の西側を流れて北へ向かっていた川は、現在の北海道大学農学部の南端のあたりを北北西に流れ当時の琴似川に合流していました。明治の初めごろの記録には、この川沿いに数軒のアイヌの家があると記されています。今回は、北海道大学文学研究院の谷本晃久教授に、明治の初めにこの川沿いに暮らしていた琴似又市さんに着目し、江戸時代の終わりごろに生まれ明治の札幌を生きたその歴史を探っていただきます。

※ バチェラー（John Batchelor）の名は、文献によって「バチラー」とも「バチェラー」とも書かれますが、本文では発音に近いとされる「バチェラー」に統一し、文献などからの引用ではそれぞれの記載のとおりにしました。